山梨新報「直言」原稿

二〇〇九年二月十三日

ゆっくり　ねろし

山梨大学名誉教授・前山梨大学副学長　伊藤　洋

古代インドのカピラ国王子として何不自由なく育ったお釈迦様にとってさえ「生・病・老・死」は人生の一大難問であったという。この「四苦」からの解放をテーマにして、栄耀栄華も妻子も捨て、脱俗の後についに悟入したブッダ８０年の物語こそ仏教の真髄である。そこでは、「諸行無常（全ては変転して止まないもの）」、「諸法無我（全ての存在には実体は無い）」、「涅槃寂静」（心安らかな悟り）の「三法印」を覚悟し、「苦・集・滅・道」の「真理」を体得した上に、「八正道」を歩めと言う。

こう説かれてもなお、幾億千万の生身の人間にとって「生・病・老・死」が人生最大の悩みである ことにかわりは無い。まして、不治を宣告された病人、加齢と共に命の輝きを失った老人にとって、残りの生をいかに生き、いかに死ぬかは実に深刻な問題である。

ところが、重篤な末期がんに侵されながらもなお「平気」で生き、かつ「平気」で死んで行った話を教えられた。そこには、現代の荒廃した医療環境下にありながら、在宅医療・終末医療に情熱を捧げる小さな有床診療所の医師ら、彼らを支える看護師・事務職員・調理士・栄養士などの医療スタッフ、それを支援する実に多勢の民間ボランティア、収穫した農産物を無償で寄せてくれる周辺農家、スピリチャル・ケアを担う宗教者たちとの献身と心の交流が有ったという。しかもこの医療機関が山梨県内にあるというのだ。

Ｏさんは働き盛りの５６歳。大学病院で悪性リンパ腫と診断され、その治療のために東京の一流がん専門病院に入院した。しかし病勢は鎮まらず、間も無く末期の症状を呈するようになった。がん一流の激痛に襲われるのだが、病院の治療は全て数値で表現され、生身に寄り添うものではなかったという。どうせ直らないなら故郷で死にたいという患者の希望で山梨に帰る決心をした。が、末期がんの患者を受け入れる施設は見つからな

い。八方手を尽くしてようやく探し当てたのが件のクリニックであった。

転院するや医師の適切な痛みのコントロールが功を奏し、Oさんは漸く愁眉を開き、家族や見舞の人々と会話を取り戻しているった。病室から見えし舞る盆地の山々、周囲に広がる田園風景、院内の温泉に癒されたOさんは食欲も回復し、病院の菜園で採れる野菜やコメに舌鼓し、家族や友人とも充実した心の交流を取り戻していった。

しかし、先の無いOさんにとって気掛かりなのは残してしまいこと。日取りは決まったものの、どれほどの不安をかかえているのか、院内の結婚式を提案。つい親戚一同は、親戚の結婚式を聞いたスタッフは、分からないらしい。そのボランティアまでが参加して盛大な式典を挙行した。それから2週間後、Oさんは静かに涅槃の地へと旅立って行った。その全容は当日の花嫁・田中愛さんの作品『心から』の3回ファ第1コンクールあり医療体験記コンクール入選作）として、6年1月2日付山梨日々新聞に紹介されている。

これらの話を含む『ゆっくりねろし』（土地邦彦編著・かもがわ出版）という本が上梓された。早速、買って読んだ。書名は「ねろし」だが、感動のまま一晩「寝ずに」読んだ。読み終えて筆者の「死に方」は決まった。死に場所はできる限り自宅。それがかなわなければ本書に書かれた有床診療所。ここに関わっている僧侶を導師にして三途の川を渡る。もちろん行き先は「西方浄土」。かくして、筆者は「涅槃」に至る道筋を発見したような気がした。

ある席上で、この話をふじ内科クリニックの内藤いずみ院長に話したら、こんな詩があるよと教えてくれた。「岸のほとりで佇むひとが／向こうへいくのに橋がない／わたしでよければ／ちょいと送ってあげましょか／岸に着いたらきしの名も告げず／ただのひと／こと『おげんきで』」（里みち子『わたし舟』）。実に好い詩だ。

医療費抑制を企図する医療現場は極度に疲弊している。烏滸がましい、医療事故のニュースあまり、医療現場は極度の荒廃に瀕している。泣かない日があっても、医療事故のニュースの無い日は無いという。こうした医療の現場で、直接従事する人々以外に、患者やその家族、周囲の住民までいう惨憺たる有様である。巻き込んで地域医療を支える体制があるという本の例は、暗夜に一筋の行路を指差している。